

遺書

Matsumoto Hitoshi

松本人志

朝日新聞社

遺 書

1994年10月 5 日 第 1 刷発行

1994年12月30日 第14刷発行

著 者 松本 人志

発行者 天羽 直之

印刷所 凸版印刷

発行所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03-3545-0131／振替 00100-7-1730

編集 書籍第一編集室／販売 出版営業部

©Hitoshi Matsumoto 1994 Printed in Japan

ISBN4-02-256809-7

定価はカバーに表示してあります

遺書
◎
目次

ウソちゃんのような質問は、やめてください

9

審査委員長の藤本義一君笑いに携わるのは、やめなさい！

12

大阪の芸人は、女と別れても2回売れなくてはならない

15

オレが島田紳助に弟子入りしなかったのはなぜか!!

18

嫌われてなんぼのこの世界同情されたらやめてやるぞノ

21

オナニーも見つかると狭い家親にはなんの恨みもない

24

芸人は客を選べる。ゆえに「笑つていいとも」を降りた

27

進みすぎてるオレの笑い3年ぐらい休んだらか!?

30

反論も悪口も大歓迎する正々堂々と来てみやがれ

33

笑いに魂を売った男は毛ジラミ程度で動じない

36

下ネタで苦情言う奴らはシェルターで子供育てろ

39

少年時代のオレを救った笑いと毛ジラミについて	42
毛ジラミで笑いをとるときオレも少しは傷ついている	45
ババア頭の君に告ぐプロの仕事はこれじゃい	48
オレはSMかもしれないだから毛ジラミも終わり	51
おもしろいやつの三大条件ネクラ・貧乏・女好き	54
この松本様があえて問うサッカーがなんじゃいノ	57
ハリウッド進出だつて!? おしりペンペンじゃいノ	60
ソニー・ピクチャーズめ週刊朝日に書いたつたゾ	63
オレだつて人をほめるゾお笑い界のいい男、4人だ	66
AV女優であつてAV女優ではない!?	69
いま、現時点で、いったい誰が日本一おもしろいのか?	72

結婚についてタツブリ書いてやるぞコノヤロー！

抱かれたい抱かれたくない!? そんなこと勝手にしなせ!

オレは家族を笑いにする他人は一切手出しするな

女がコメディアンとして天下を取れない理由

芸能人の好感度も大事だけどあんたの好感度はどうだろか

センスとオツムがない奴にオレの笑いは理解できない

あるとき横山やっさんを殴ついたらよかったわけ

やっぱリストレス解消は人の悪口を言うことだ

そんなことより段ボールのおっちゃんなんとかしたれ

お知らせがありますレコードデビューします

コソドロ芸人の横行でバタリについて考えたゾ

まだ見ぬオレのガキへオレはおまえを愛させんツ

あとからきこつたゝと当てる占い。前に教えるノ

吉本興業という会社をマジに批判させていたなく

大切なオレのキンタマは意味あることに使つてくれ

文才ゆえの誤解をとこの連載はオレが書いてる

深夜番組は外国人ばかり!? 不景気でテレビが危機だノ

無名時代のオレと島田紳助の感動秘話だノ

クラブのバカ女ども山口百恵のプライドを知れ

オレの後輩の事件てみなさんにお願ひです

チヤホヤされて喜ぶほどバカでも無神経でもないゾノ

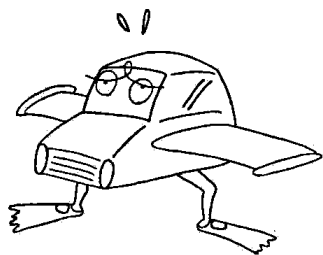
来年の二田佳子戦に備えオレのライブは1万円だ!?

笑つてあげる!? クソくらえオレは笑わせタレントだろ。
天才少女の親たちに告ぐ、人間、はえてからが勝負だ。
オレが唯一、誕生日を知つてゐる男、浜田を書くゾ。
オレの超人ぶりは「クスリ」という疑惑だつてゐるゾ。
口は悪いかもしれないが悪口を言つたことはない。
少々くさいが言わしてもらふ雨の日の「ありがとう」
あとがたり

ブックデザイン ● 多田 進
写真 ● 浅野哲司 (前日新聞出版写真部)
本文イラスト ● 松本人志

遺書

ウソちゃんのような 質問は、やめてください



テレビ番組雑誌には必ず「視聴率ベスト10」などという胸クソの悪いページがある。

そんなことはテレビ局の人間や番組のスポンサーが気にすればよいことだ。一般人が意識して、視聴率の高い番組を、学校や職場で取り残されないように、好んで見るようになるというのは、非常に怖いことではないのか。

タレントがこれを意識しだすと、これはもう最悪で、テレビというものがどんどんワンパターン化し、つまらなくなるのではないのか。

お笑い番組がいちばん困りものだ。だいたい、笑いなんて、百人中百人が笑うことは、

ほんとうはそんなにおもしろいことではないのだ。

レベルの高い笑いが分かる人間の絶対数は、かなり少なく、そのパーセンテージは二、三パーセントぐらいだろう（もつと少なかったりして）。野球のホームランは、だれが見てもホームランだが、笑いのホームランは、気づかれないことが多いから悲しい。しかも、自分のバカをタナに上げて文句を言うヤツがいるから、たまったものではない。

そろそろ本題に入ろうと思うが、ダウンタウンは、ほんとうにすごい二人なのである。とくに松本は今世紀最大の天才で、おそらくこの男を、笑いで抜くコメディアンは出てこないであろう。ハッハッハッ。

「いまいちばんおもしろいコメディアンは？」と聞くと、若い年齢層はダウンタウンをあげる。年寄りや子どもは、違うコメディアンをあげるであろう。が、しかし、ここで考えてほしいのは、どの層が笑いをいちばん理解しているかということである。いちばん敏感で、感性がピークに達している世代——。答えは若い層である。

よく、お笑いの世界で「天下を取る」という言葉を耳にするが、それは、たくさんの人に支持されているということではなく、いかに笑いのレベルの高い人間に支持されているか、ということなのである。そういう意味からも、ダウンタウンは、日本一のコメディア

ンということになる。

ここで間違っていけないのは、「日本一のコメディアン」で、「日本一のタレント」ではない、ということだ。

コメディアンという肩書で、歌をうたったり、ドラマに出たりするのは、オレは違うと思う（これは、相手の浜田にもいえることだ）。それで評価を得ても、コメディアンとして、なんの意味もない。

いつまでも笑い一本で勝負していきたいものである。それはすぐく勇氣と自信のいるものだが、天才松本は、あえて挑戦しようと思う。

このコラムを読んだ人は、このオレさまに、

「松ちゃんは、ドラマに出ないの？」

などというウンコちゃんのような質問は、やめていただきたい。

いまダウンタウンは、週四本のレギュラーをもっている。この先も、テレビの仕事を続けていくであろう。

でも、きつと視聴率二〇パーセントを超えるような番組は、できないし、しないだろう。日本人の笑いのレベルが、もっともつと上がらないかぎり。

審査委員長の藤本義一君 笑いに携わるのは、やめなさい！

* 絵と文は一ツの関係
ありませんわー



前回はかなり横柄に書いてしまったが、引き続き横柄に書くぞコノヤロー！

ときどきテレビを見てみると、過去のコメディアンを振り返る番組をやっている。故・林家三平などの古いVTRを流し、司会者やコメンテーターなどが、「いやー、いま見てもおもしろいですねー」と、齒の浮くどころか、アゴごと空に飛んでいきそうな、なまあたたかいことを言ってくれる。決まってオレは、テレビの前で、「チャンネルを変えよっかなあー」になってしまう（故・林家三平師匠の身内の方々、まあまあ落ち着いて）。

笑いというのは、その時代時代でどんどん変化していくもので、それは、本人も（あ

の世で）分かっていることである。そんな司会者の発言は、ぜんぜんほめ言葉でもなんでもないし、もしも本気で言っているのなら、林家三平の全盛期から、感性がストップしてしまっているウンコちゃん人間である。

笑いをナツメロといっしょにしてしまうバカが多いから困ってしまう。

「笑いを歌などといっしょにしてしまうな！」

と言いたい。

デビュー当時、よく新人漫才コンクールのようなステージに立たされ（これはレコード大賞を意識しているのであろう）、なまじっか才能があるがために、最優秀新人賞などをよくもらった。それ自体、いまとなつてはあまり意味のないものだが、まあ当時はうれしかったものだ。だが、この後がタチが悪い。

司会者「さあ、それでは、最優秀新人賞に輝きましたダウンタウンのお二人に、もう一度、先ほどの漫才を受賞漫才としてやっていただきましょう。ハリキッテどうぞー！」

……殺すぞ……。

同じネタを二回やってうけるわけがない。まして、漫才というものは、いかにアドリブっぽく見せるかという部分が大切であり（持論）、特にオレは同じことを二回言うのが大

嫌いで、ほんの何時間か前に言ったこととまったく同じことを言うのは、恥ずかしくて顔が真っ赤になってしまう。

女漫才コンビが受賞しようもんなら、もう大変。ネタの途中で泣き出したりしやがる。すると、客席で、家族が涙し、それを見た客がもらい泣き、それを見た司会者の目がうるうる……。

「ハァー」（コメント不可能）

もう一度言おう。笑いと歌をいっしょにするな！ いまでもそんな番組をやっている大阪の放送局、ただちにやめなさい！ 審査委員長の藤本義一君もやめなさい！ 君は、素人以下だ！ 笑いに携わるのをやめなさい。

まあ、それは今度たっぷり書くとして、ダウンタウンの昔のVTRを勝手に流すのも、やめなさい！

そしてなによりも、俺がこの世を去ったとき、司会者は、

「いやー、いま見てもおもしろいですねー」

だけは絶対に言ってくれるなコノヤロー。もしもそんなことをぬかしたら、枕元に立って、そのころには笑えない医者ネタをやるぞ、コノヤロー！